

改変プリコネ部 スタイリッシュアクションの裏技.daredakoitu

イネ！ホルマリン漬け王者決定戦

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ほんへを魔改造！悲劇的ビフォーアフター中なので初投稿です。
イベントや思いついたネタの置き場ともいう

章管理の仕様理解したらこっちもビフォーアフターします。

目次

| | | | |
|--------|--------|--------|---------|
| M 20 | M 17 | M 9 | D M C 1 |
| ～ M 22 | ～ M 19 | ～ M 17 | M 1 |
| 直前まで | | 直前 | ～ M 8 |
| 29 | 22 | 13 | 1 |

夜も更けた美食殿のギルドハウスに、通信魔法の通知が鳴り響く。

「美食殿だ。——いや、悪いがウチは九時で閉店だ」

話し終えるやいなや、乱暴に通信を切る。

美食を求めて様々な依頼をこなす内に、便利屋まがいの風評が立つてしまったようだ。そして、今日のようにスカな依頼が舞い込む日も少なくない。

「まったく、探偵やら搜索なんてのは他所でやってくれよな」

どうしたもんかとユウキが頭を捻っていると、爆音と共にギルドハウスの扉が吹き飛ばされる。

「おいおい、随分慌てた客だな？ トイレなら奥……なんだ、キヤルか。ペコリーヌもコツコロももう寝てるぜ？」

動じた様子もなく、ユウキはうそぶいた。

「ねえ、あんた最近はいろんな仕事やってるみたいじゃない？」

「まあな。ヤバい仕事なら大歓迎だ。エンゲル係数的に……だが」

「数ヶ月前、陛下に敗れて記憶を失ったープリンセスナイト、ミスター・ユウキ。あんた向きの依頼があるのよ」

「へえ……その様子だと”大当たり”は近いな。いいぜ、受けてやる」「なら——覚悟はいいわね？」

言うが早いかキヤルはユウキの剣に電撃を放ち、怯んだユウキの右腕を蹴りつけ、間髪入れずに膝蹴りで吹き飛ばす。

次いで取り落とした剣を拾い上げ、電撃を纏わせながらユウキに投げつける。

「あ……ぐ、ぐあっ」

突然の事態に対応出来ず、投げられた剣が胸に突き刺さる。そこへ、キヤルの更なる電撃が襲う。

「おわああああっ!!」

「それでもプリンセスナイトかしら。剣の使い方も忘れちゃった？」

未だ動けないユウキへ付近に転がっていたテーブルが投げつけられる。

だが――

「剣だつて？H a ― h a ！こいつを喰らいな！」

いつの間に出現したのか、ユウキの背後には魔力で生成影された剣剣が出現していた。

途切れることなく幻影剣を放ち、テーブルを押し返して粉碎する。

木片を回避したキヤルが振り向くと、剣が胸に刺さったままのユウキがそこにいた。

「アイツに負けて、目が覚めたら、こんな体になつてたもんでね」

胸の剣を引き抜きながらそう答える。剣を地面に突き立てるのと時を同じくして、胸の傷が塞がっていく。

「なんて力なの？」

「しかし、アイツの話を持ちかけるつてことは、”大当たり”は近いな」

キヤルに幻影剣を突きつける。だが、怯んだ様子もなく「力を借りたいの」と返す。

「なるほど、もう侵攻が始まったのか？」

「これからよ。使えるものは何でも使う気なの。あの――ランドソル城で」

書き置きを残したユウキは、キヤルと共にランドソル城へ向かう。

城門へ差し掛かった辺りで「陛下はこの上にいるわ。さあ、行くわよ」と行つて軽々と門を超えて行つてしまう。

もちろん、そんな術を持たないユウキは一人陸路に行くしかないのだが。

正門を潜ると、待つてましたと言わんばかりに鉄柵が降りて錠がかけられる。押ししても引いても微動だにしないところを見ると、逃がす気はないらしい。

「まあ、俺がアイツと同じ立場ならそうするもんな」

そう独りごちて歩み出す。

城内に、人の気配はなかった。代わりに、悪趣味と言える人形が大

量に徘徊していた。

人でないならと気楽にブチ壊して回っていると、大聖堂らしき部屋にたどり着く。

奇妙な感覚を覚え、振り向くと上から蜘蛛のような魔物が天窓を突き破って落下してくる。

「なんだ、このチビは？ 大きな鬨気を感じたが……ただの人間か！」

ユウキに肉薄したその魔物は、顔を見るなり挑発してくる。

「なんだ化け物。筋肉以外にもちゃんと中身は詰まってるのか？」

返すユウキも脚の一部を小突いて嗤う。ちなみにそこそこ詰まってそうな音がした。

「ほざいたな虫ケラ、踏み潰してくれるわ！」

複眼を赤く変貌させて吠え、爪を振り下ろす。が、それはユウキが跳躍したことで空を切って終わる。

振り向いた魔物は地面に頭を突っ込み、ユウキの足元からマグマを噴出させる。

「お、つとと。ちよいと厄介だな……」

反撃とばかりに脚の一部に斬りかかるが、鉄の塊を叩いたかのような強い衝撃に、ユウキの剣は跳ね返されていた。

「マジかよ……」

「無駄なことを！ 死ぬ、小僧！」

突如として飛び退いた蜘蛛モドキの口部に魔力が集中していく。ユウキが判断に戸惑っていると、巨大な火球が吐き出される。

一発目はすんでのところで避けられたが、間を置かず放たれた二発目は避けられなかった。

だが、無意識のうちに振った剣はその火球を弾き返していた。

(なるほど、あれは弾けるのか。それにまともに食らったのか仰げ反りもしたな。あそこは防御が薄いみたいだな……)

小さく微笑むと、剣を構えて滑るように突進する。狙うのはただ一点、蜘蛛モドキの口部分である。

体勢を立て直した魔物は、再度火球を放とうと魔力を集中させる。だが、発射直前で剣が突き刺さり、体内で魔力が爆発してしまう。

「お、のれ、人間め……。我の……サーヴァント・ロクスの……恐ろしさ……」

「まだ喋れるのか、想像以上にタフだな」
「……ッ」

ユウキは頭上に影が差すのを感じたが、それがロクスの尻尾だと気づいたのは、突き刺されて地面に叩きつけられてからのことだった。
「ぐ、は……あつ」

肺から空気が絞り出され、意識が混濁する。揺れる視界の向こうには、ロクスが地面に作り出した魔力の門へと逃げる様子が映し出されていた。

（あ、相打ちか……？逃げたってことは、また来るんだよな……）

先を急ぐべきだと判断したユウキは、持ち込んでいた
トワイライトキャラバン
指定暴力ギルド謹製の回復薬を浴びるように飲み干す。

完全に傷が癒えたのを確認してから、大聖堂を後にする。

回廊を歩いたユウキは、不意に強烈な振動を感じた。

振り返ると、ロクスが回廊を塞ぐようにして立ちはだかっていた。

吠えつつ回廊を突き進んでくるロクスはまた、時折火球を吐き出しつつ爪を振り下ろしてくる。

「しつこい野郎だな……今は相手してる場合じゃねえんだよ。また後で会おうぜ」

後方への宙返りなどで猛攻を避けつつ、近くにあった扉へと駆け込む。

「こんなところあったか……？」

扉の先は、噴水が設置された中庭だった。

以前食材を追いかけていたら、たまたまランドソル城を見下ろせる位置にまで来ていたのだが、その時の記憶と一致していないのだ。

「アイツが作り変えたのか？道中の気味悪い人形といい、センスを疑うぜ」

とりあえず先へ行こうと、扉を開けようとするがビクともしない。よく見ると扉に封印が施されている。

「どうしろってんだ……」

諦めて別路を探しに足場を降りると、背後に殺気を感じて横に転がる。

すれ違いざま、ユウキは影のような何かを掠めていくのを感じた。虚しく空を斬った影は、着地するとすぐに体を再構成し始める。その姿はネコ科の動物に酷似していた。

「黒猫か？宅急使も魔女も間に合ってたんだ、こっちは！」

すかさず幻影剣を打ち込むが、相手の激しい攻撃をかわしながらなので、上手く当たってくれない。また、当たったところで連続ヒットに耐性があるらしく、間を置かなくてはならないらしい。

噛み付いてくるのをギリギリで回避し、無防備な胴を無慈悲な刃が切り裂く——ことはなかった。魔力で作り出した盾が剣を受け止め、かつ矢に変形させてユウキを襲ってきたためだ。

これは間一髪で飛び越したが、幻影剣もまともに刺さらず、近接攻撃はカウンターをしてくる相手に苦戦を強いられていた。

「とっておきの幻影剣、こんなところで使うとはな」

眩き、魔力を集中させる。

それに危機感を感じたらしい影が、頭部をヤリのような形状に変化させて突き出してくる。

You're going down!
「跪け！」

跳躍でヤリ攻撃を回避し、伸ばされた頭部へと着地する。

驚愕で一瞬怯んだ影の胴へと幻影剣が降り注ぎ、さらに動きを固められる。そこへ機関銃の如き速度で幻影剣が集中砲火され、ついにコアが露出する。

「あれが本体？なるほどな」

ロクスにも撃ち込んだ突^{スティング}進をコアに叩き込む。二、三度繰り返すと、体色が赤くなつていくのが見えた。

(なんだ、この言いようのない不安感は……)

焦燥感から壁を蹴り、また転がりながら影の突撃を回避する。合間に足元からヤリが飛び出してくるので避けにくいことこの上ないが、しばらく続けていると不意に影が爆発した。

「ひでエタイムロスだ……」

ユウキは封印が解けた扉を空けて歩き出した。

扉の先にあつた階段を登って行くユウキ。だが、途中で行き止まりのようであたらを踏んでしまう。

仕方なく引き返そうと振り返ると、ちょうどジャンプ一回で届きそうな位置に剣が突き立てられているのが見えたので、探索ついでに頂戴する。

だが、過度な装飾が示すように戦いのために作られたものではないらしい。そろそろ新しい剣が欲しかったユウキは思わず肩を落とす。剣のあつた場所の真下にあつた扉をくぐると、そこは寝室らしい。それと同時に、意味深な胸像が目に入る。

手にしていた儀礼用の剣が震えだしたので、胸像の穴に突っ込んでみる。

(なんのためにこんな仕掛けを……?)

ユウキが戸惑っていると、胸像が啞えていた玉が足元に転がる。ワケの分からない構造に混乱するユウキの背を、気配が襲った。

振り返ると、鏡の中のユウキがゆっくりとこちらに向け歩き出していた。

僅かにこちらの剣が届かない位置で立ち止まる偽ユウキ。

その姿は、もはや闇と呼ぶ方が似つかわしいほど禍々しく輝く漆黒の甲冑を見を包んだ剣士へと変貌する。

「掃き溜めのゴミにしちゃガッツありそうだな」

牽制のつもりで放った言葉の返事は、無言で指を鳴らすのみ。

それが合図だったのか、寝室にある大きな扉が開く。鎧剣士はそこから飛び出して行った。

「着いて……い……ってことか。いいぜ、ノってやる」

ユウキも、その後を追う。

バルコニーから広場に飛び降りると、尖塔で待ち構えていた剣士がユウキのすぐ近くに降りてくる。

そのまま挑発するような動作を見せたので、先攻とばかりに何度か斬りつける。だが、やはりというかさしたるダメージにはならない。

こちらの攻撃が届かないと踏んだのか、剣士も凶刃で返す。

そのどれもが、これまで対峙してきた魔物の比ではない鋭さと重さを持つている。数合打ち合っただけで、痺れが両腕を襲う。

(ま、まずいぜ、腕力もスピードも向こうの方が上なんじゃないか!? こんなのと打ち合ったら剣より先に腕が折れちまうぜ)

弾きを狙うのは不利と判断したユウキは、剣士が振り抜く剣を跳躍で飛び越し、上空から体重を乗せた一撃を振り下ろす。

よろめいたのを確認して、叩き込めるだけの斬撃を浴びせるが、瞬時に姿を消し広場から城壁へと逃げられてしまう。

「オイオイ、正々堂々と登場した割にそれか? やっぱ魔物だけあつて汚エ手がお好みらしいな」

うそぶいてみたものの、既にユウキは疲労が隠せない。

それでもなんとか剣士の元まで行けるほどの体力はあるようだ。

「……」

「うおっ、飛び道具かよ……まあ、こつちも使ってるし卑怯とは言えんな」

城壁に着いたユウキを待っていたのは、凝縮した魔力を放つメテオのラッシュだった。

ロクスの火球と同じだろうと思い、タイミングを合わせて剣を振るが、上手く弾けないうえに体勢を崩してしまう。

そこへ剣士お得意の連撃が襲う。これも何度か弾いたが、不意に剣士が剣を腰まで引いて低く身構える。

居合の構えだと気づいたとき、ユウキは上空から剣を振り下ろしていた。

(上手く行けば相殺は狙えるかもな……だが、外したら……)

一瞬に賭け、体重と位置エネルギーを乗せた長剣を叩きつける。

だが、居合い切りの方が僅かに早く、ユウキは大きく吹き飛ばされる格好になった。

「ぐ……うあ、はっ……」

背中からまともに石壁へと叩きつけられ、一瞬気を失う。

剣士がゆつくりとこちらへ迫るが、逆に威圧感と絶望感を増している。

大上段に構えられた大剣を、しかしユウキは睨みつけることしかできなかつた。

死の刃が迫るが、それでも微動だにしない。

正中線まで数インチ、というところで大剣が脇へ逸れる。

剣士が一瞬怯んだ隙に、そのまま長剣の腹を滑らせつつ腕を掴む。

それを、躊躇なく真逆の方向へとへし折る。

「……お、ツー」

思わずうめき声を上げる剣士だが、その表情は何いしれない。

おまけと言わんばかりの振り抜きが、ついに剣士を吹き飛ばす。

立ち上がった剣士は、すかさず瞬間移動で更に高い城壁へと逃げる。もはや焦燥を隠せないようだった。

あとひと押し、そう確信したユウキだが、既に足取りは重く、また剣を振る力も僅かだった。

(こんなところでこれを使うことになるとはな)

それもまた、トワイライトキャラバン謹製の回復薬だった。

効能の違いは、一時的に無敵状態になり、攻撃力も素早さも跳ね上がるといふものだ。代償として、雑多な素材に多額の資金、そして錬成時間を必要とするが、効果はお墨付きだ。

「速攻で終わらせてやるぜ、鎧野郎！」

城壁を伝い、素早く剣士に相對する。

相手が居合と似た構えのまま突進してくるが、ユウキはそれを斬り上げて弾く。なおも連撃を繰り返そうとする剣士に、ユウキは完璧なタイミングで弾き続ける。

もう十合ほどを弾いたあたりで、剣士のほうが音を上げたのかうなだれて無防備になる。

対するユウキも既にドーピングの効果も切れていたが、意地で放ったステインガーが勝負を決した。

とどめを刺そうと剣を振りかぶるが、ユウキの背へと身を翻した剣士の蹴りで叩き落とされてしまう。

そのまま格闘技の連撃を食らい、またも壁に叩きつけられる。

今度は逃さんとばかりに首を捕み、締め上げる鎧の剣士。

さしものユウキも死を覚悟したが、掴まれたときの対策として仕込んでおいた幻影剣を展開する。

(これが効かなかつたら、マジにお手上げなんだがな……)

焦りを隠せないユウキだが、その心配は杞憂に終わった。

剣士の方も長く戦い続けたせいか体力の限界らしく、全身を炎に変えて飛び去ってしまった。

「はっ、や、やった、んだよな……?」

安堵のため息とともに倒れ込む。

しばらくして息も整い、体力もそれなりに回復したので城壁を後にする。

階段塔まで戻ると、下から感じる波動が胸像の吐き出した玉を震わせている。どうやら先へ進む鍵の役割をしているらしい。

もうツツコむ気力はなく、どうとでもなれといった態度で下層にある扉に玉を嵌め込む。

扉の先は、一本道の地下水道でできていた。所々に崩落した箇所を見ると、もう使われていないらしい。なので様々な魔物が蔓延っていた。

「貴様らの相手をしてる暇はない……失せろ」

低く呟き、自身の周囲に幻影剣を配置する。何かに接触する度に碎かれていくが、構わず再配置を繰り返し深部へと進む。

いよいよ行き止まりというところで、異常な熱を放つ台を見つける。

正確には、台というよりそれに鎮座する鍵が、だが。

「……コレ持ってけってか?ふざけるよ、クソツタレ!」

なるべく触れないように、マントで包んで持っていかうとする。

だが、鍵の放つ熱はその程度では防げず、徐々にユウキを灼いていく。

「陽光の鍵……?なんだってこんなもん、処分せずに放置するんだか……」

鍵に刻まれた文字を読み上げ、なぜ魔物たちは近付こうとしなかったのかを悟る。

(並外れたタフネス持ちの魔物ですら焦げるのか、そりや確かに封印するしかねエのかもな……)

身を灼かれる前に地下水道を去ろうとすると、扉を目前にしてまともロクスが現れる。

「随分と狭い所がお好みみたいだな……」

返事はない。

ユウキも、もはや不定期に吐かれる火球を弾くことくらいしか頭がない。

都合六発を弾かれ、顔面に直撃したロクスはまたも逃げ帰る。

ユウキも、その場に残された緑色に光るオーブで体を癒やして立ち去る。

扉の先にいた雑魚はすべからく無視して突き進み、階段塔を駆け上り、再度寝室へと辿り着く。

鎧剣士が出てきた際、鏡の傍にあったレリーフ。あれに鍵を差すのだろうという予感がユウキを突き動かしていた。

(頼むぜ、マジで……ここであつてくれ)

予想通り、太陽のレリーフが動き出し、壁が上昇する。

その奥にあった扉を抜けると、城のホールの上部に位置する渡り廊下があった。

ご丁寧に壊されていたので、鍛え上げた脚力で一足飛びに飛び移る。失敗すれば騎士像に貫かれ、無事では済まないだろう。

反対側の戸を開けると、ホールの屋上へ向かう準備室みたいなので、安置されていた像を調べると脳内に声が響く。

『古の戦いの技を欲す者。我に魔族の血を捧げよ』

「なるほど、このための結晶化か。悪趣味な像だな」

茶化しつつも格闘技と体力、魔力の増加に関わるアイテムを根こそぎ収集していく。

「守銭奴は（メルクリウス）財団だけにしてくれよな、まったく」

要求される血が多かったのか、ユウキは取れるもの全部取った挙げ句像を粉碎してしまった。

像の反対に位置する扉を開け、ホール屋上から迂回路を探す。

といつても、目立つ出入り口は一つしかなく、そこを通ろうとした
が降りてきた鉄格子に阻まれてしまう。

同時に、背後に強力な気配を感じる。

振り向くと、満身創痍もいいたこのロクスが壁をよじ登ってユウキ
の傍に跳躍する。

「休み時間は終わったぜ坊や！ガキの遊びはもうやめだ、やりたい放題
やってやる！」

言うが早いか、尻尾を威嚇気味に突き出す。

「やれよ、マジな遊びをしようぜ！」

ユウキもまた、煽り返して構える。

勝負は意外な方法で終わった。

ロクスの体重に、天窓のガラスが耐えられなかったのだ。

ユウキは薄々その事実気づいていたが、なかなか誘導できずにい
た。

仕方なく、火球を飛び越して尻尾のある位置に兜割りを叩き込んで
いたのだが、どうも背後を取られると大ジャンプで仕切り直してくる
らしく、それが誘導の決め手になった。

ロクスの背後をうろついて大ジャンプさせ、落下位置を示す影を天
窓にまで引つ張り、降下を確認してから後方宙返りで自分は天窓から
逃れる。

これを繰り返していたら五回くらいで窓が割れたのだ。

そして、その落下位置は――

渡り廊下の中間に位置していた、騎士像。若かりし頃の王を模して
いるのだろうか、今はもう無慈悲な騎士像でしかない。

ロクスもなんとか生き延びようともがくが、逆に傷を広げるだけに
すぎない。

「お前、ただの人間ではないな？何者だ」

よもや人間に負けるなど、ほんの僅かも考えられなかったロクス
は、純粋な疑問をぶつける。

だが、ユウキは答えない。

「まさか、本当に人間だとでも……？」

「そうだな。ちよつとばかりしタフなだけの、人間だ」

「そんな、バカな……！」

「Sweet dreams.
ネンネしな」

断末魔を上げながら息絶えるロクス。

完全に消滅したのを見届けて、ユウキは立ち去る。

「ロクスが負けた？まさか、これ程とは……」

騎士像の下でキヤルはそう呟いた。

M9～M17直前

サーヴァント・ロクスを無事降したユウキは、戦いの余波で物理的にしばらく城に戻れないことを悟った。

具体的には、損壊区域が広く王宮騎士団が駆け付けてくること間違いなしだからだ。

(仕方ねエ、どっかで暇つぶししてから様子見て戻りゃいいか)

どうせならと、回廊から時折見えたコロシウムを指す。

だが、突如吹き荒れた暴風により歩みを止められる。

「貴様か、カイザレインサイト覇瞳皇帝様に楯突くプリンセスナイトというのは」

低くくぐもった声が頭上から降り注ぐ。

見上げると、伝説の巨鳥ロツクを想起させるような魔物が外壁に佇んでいる。

「消えな、トリ頭。それとも痛い目見みるか？」

今のところは面倒なので、適当にあしらってから離脱すればいいと思ひ、安い挑発で返す。

だが、巨鳥は挑発には乗らずに全身に雷を纏わせながら急降下してくる。

ユウキはそれをバックジャンプでかわし、着地と同時に剣をブーメランのように投げる。

予想通りそれは弾かれてしまうが、それは完全な囷だった。

剣を投げた後に駆け出したユウキは、一足飛びで巨鳥の頭まで迫り、それを踏み台に跳ね上がり、

空中で剣を手にする。

ユウキはそのまま体を回転させて、巨鳥の背に着地するが、同時に全身を電流が駆け抜けるのを感じた。

「勘弁してくれよ……俺の夢ぶっ壊しやがって」

腹いせとばかりに背中をたたつ斬る。

先に音を上げた巨鳥が煩わしそうにユウキを振り落とそうとするが、その勢いを利用してコロシアムの入り口付近まですっ飛んでいく。

「貴様……！」

「悪いな、先にこっちの用事を片付けてから、続きをしてやるよ」

そう言い放ち、コロシアムの扉を開け内部へ侵入する。

「さつきぶり……ってどこか？わざわざこんなところで待ってるなんてな、用意がいいぜ」

「……」

コロシアムの片隅、ユウキが通った入場門の反対側に、見知った鎧剣士が佇んでいた。

ユウキはゆつくりと、しかし油断なく剣を抜き放つ。その切先が地に触れた刹那、鈍色の突風が剣士を襲う。

だが剣士側も、頑強な鎧と強靱な肉体でそれをあえて正面から受け止めていた。

「カウンター狙いか？甘いんだよ！」

ユウキは突き刺したままの剣から手を放し、反撃に繰り出されたボディブローをダツキングでかわしつつ剣の腹を蹴りつける。

どんなに鍛え上げた肉体でも、振動を殺すのは容易ではない。一瞬の怯みを見せた剣士に、必殺の二連ハイキックが炸裂する。

「まだまだっ！」

左後ろ回し蹴りから右膝を軸とした時間差の二段蹴り。ダメ押しとばかりに縦方向に回転しながら、左右の踵を同時に叩きつける。

場内で見かけた人形を手当たり次第ぶち壊して回る際、せっかくだからとトレーニングに付き合ってもらったのが効いているようだ。

が、剣士の方も黙ってやられているわけではない。ユウキの足首を掴むと、豪快に振り回す。

対するユウキも、受け身の体勢を取り衝撃を最小限に抑える。

「つとと、さすがにいい腕だな、鎧野郎」

「……」

剣士の方かというと、短時間で劇的に腕を上げてきたユウキに戸惑うような様子だった。

それでも、さしたるダメージを負った様子はなくボディブローからアッパー、素早い踏み込みからの後ろ回し蹴りのコンボを繰り出す。

さしものユウキもすべてを回避するのは困難なようで、回し蹴りだけはまともにも受ける格好になる。吹っ飛んだユウキは後方に大きく飛び跳ね、一度深い深呼吸をする。

(さすがにブーツ越しのキックは効くな……)

斬撃を弾き合い、打撃の応酬をかわし、先に隙を見せた方に情け容赦のない連撃を叩き込む。いつしか二人の実力は拮抗し始めていた。

ユウキもさすがに腕が痺れ、フットワークも重くなりつつあった頃、剣士側も疲労の色を隠せないでいた。

渾身の力で振り上げた剣が、遂に剣士の獲物を弾き飛ばす。

自身も剣を投げ捨て、ストレートからボディ、ハイキックの後に回し蹴りを繰り返し出し、さらに回し蹴りの勢いを利用して二度、三度と蹴りの乱打を浴びせる。

最後の蹴り上げを食らった剣士は、地に伏して悶たあと炎をまともに何処かへと飛び去ってしまった。

「逃げたか……？ ちよつと見ないうちにチキン野郎に成り下がるとはね……」

剣を拾い上げたユウキは懐から回復薬を取り出し、またも頭上から浴びて傷を癒やす。

コロシアムを出ようと出口に足を向けたとき、不意に上空が曇り雷鳴が轟く。

見上げると、先程やり過ぎした巨鳥が悠然と降り立ってくる。

それに合わせるように、ユウキも左手に魔力を溜め、巨鳥の頭部に^{メテオ}火球を放つ。

溜めにより貫通力を高められたメテオは、そのままコアのある胸部をも貫いていく。

それが痼に障ったのか、巨鳥は自分の周囲に雷撃を落とし始めた。バックジャンプでかろうじて落雷を回避したユウキは、直感で危機を感じ取り、右手方向に転がる。直後、ユウキを掠めるように落雷が駆け抜けていく。

「マジかよ、ご機嫌ななめだな？」

「当然だ。このまま貴様を逃したとあっては、カイザーインサイト様

に顔向けできん！」

そう言い終えるや否や、咆哮と共に再度落雷を発生させ、合間に電撃の帯と球を連続して飛ばしてくる。

いくつかは回避行動で避けられたものの、どうにも間に合わない時はジャンプに頼るしかない。それこそが、巨鳥の狙いだった。

すかさずユウキの周囲にV字状の電撃を放ち、左右から挟み込んで追い立てる。

「おっ、おっ、やってくれるじゃねエか……！」

たまらず、両腕に仕込んでおいた魔法で衝撃波を発生させて強引に着陸する。

だが、トラップのように張り巡らされた電撃波の内の一つに足を取られてしまう。

一瞬動きの止まったユウキめがけて、巨鳥が上空から急降下してくる。巨体の体当たりをまともに食らい、派手に地面に転がされる。

巨鳥がトドメを刺そうと近寄ったとき、そこにあったのはユウキがいつも身につけていたマントのみだった。

「ジャックポット、と言うべきか」

「貴様……！」

頭上にいたユウキを振り落とそうと羽根を広げようとして——できなかつた。

「苦労したんだぜ？ いちいち狙いを定めて幻影剣をピンポイントで撃つなんて、今までやったことなかったからな。ま、おかげでご自慢の羽根を傷物にしてやれたんだが」

巨鳥が言葉を発するより早く、兜割りで黙らせる。

だが、なおも立ち上がりとする巨鳥に、ユウキは驚愕と畏怖を隠せなかつた。傍目に見てももう助からないだけの重傷をその身に負っていたからだ。

「私も……覇瞳皇帝様に仕える身……これでは、終わらん!!」

「ッ!? やめろ、致命傷だ!」

「偉大なる我らが主よ、我に力を与え給え、この者を倒す力を!」

異様な気配を感じて振り返ると、空間の裂け目からこちらを覗く覇

瞳皇帝と目が合った。

「おお、覇瞳皇帝様……」

「サーヴァント・マギ、貴方には失望したわ。餌にする価値もないわ」
「覇瞳皇帝様!? お、お待ちくだ……ぐうああああああ!!!」

覇瞳皇帝がかざした手から強大な魔法が放たれ、巨鳥^{マギ}を塵一つ! 残さず消し去る。

混乱したままのユウキを後に、覇瞳皇帝は裂け目を閉じる。

「あのカマ野郎……」

と、後方でコロシアムの扉が開く音がする。気配からするとキヤルが来たようだ。

「勝ったの? 大したものね」

だが、そちらには目もくれず続ける。

「覇瞳皇帝……汚ねえ事しやがる。自分の仲間を虫ケラのように! 前の戦いの時もそうだった。記憶がなくなる前の話を思い出す……弱者のために戦った——とも勇気ある英雄の話を……。戦友に誓って奴に死を!」

(えっ、陛下から聞いてた話と全然違うんだけど!? こいつってこんな暑苦しかったつけ? ああもう、使える駒がどんどん減っていくじゃない! こうなったら、秘密兵器を起動するしかないわね……)

キヤルはそれと悟られないよう気配を消し、コロシアムを後にする。その際焦りから魔光^{よく光るだけの石}石を落としてしまったが、気づく様子はないかった。

そういえば、とユウキが振り向いたときには、魔光石が転がっているだけだった。

(そろそろ暗くなってきたしな、丁度いい。……なんでこんなのが落ちてんのか知らねエけどな)

暗闇を利用して場内に戻ると、一部の構造が変わっているようだった。いつにも増して人ならぬ者どもの匂いが満ちている。

大広間にあった神像が消え、謎の紋章がぼっかりと佇んでいるのを、目ざといユウキは見逃さなかった。こんな状況だからこそ、好奇心に従うのがユウキという男だった。

(さて、何が出てくるかな)

手早く紋章を起動させると、後方に合った騎士像が爆音と共に爆ぜる。

代わりに現れたのは、雷でできた一つ目のコウモリだった。挨拶代わりに一筋のビームが放たれる。

それをジャンプしてかわし、コウモリの真下に着地する。

するとコウモリは閃光を放ちながら、その形状を変化させてユウキの前に立つ。その姿は、一つ目であること以外はユウキに酷似していた、

「あん？モノマネなら間に合ってるぜ、帰んな」

相手にするまでもないと判断し、幻影剣であしらが、体が実体でないことが災いしてダメージにならない。

「クソかよ……」

仕方なく剣を抜き、一撃で仕留めるほどの殺気を乗せたステインガーで偽ユウキを貫く。

勝負はあつけなく着いたが、自分と同じ姿をしたまま力尽きる魔物に、嫌悪感を抱かずにはいられなかった。

そのうえ剣も雷気を帯びてしまったので、不慮の事故を防ぐためにも今後鞘は使えない。

ユウキは、過去で一番大きなため息を吐いた。

昼に通れた通路が通れなかったり、余計な魔物との戦闘(前述の偽ユウキは分裂までした)に時間を取られたりと右往左往していると、異常な雰囲気にもまれた大聖堂に辿り着いた。

目を凝らすと、謎の水たまりがあることに気付く。

膨大な魔力を放つそれに近づくと、不意にその水たまりからゲル状の物質が飛び出す。

「なんだこりゃ、ガイコツ？」

おそらく他所で犠牲になったであろう、多数の人骨が浮いた不気味な粘液は、観察を続けていたユウキを丸呑みにしてしまった。

(圧殺でもするのかと思ったら、妙なところに来たな)

おそらくはゲルの内部であろう異空間で、見慣れた魔物の影を発見

する。

「おい、こんなところで何してんだ？死体を丸ごと食われたのか？」

だが、魔物は答えない。よく見ると全身が青みがかっている。

「なるほど、悪夢ナイトメアってわけか。確かにいい思い出はないな」

既に5回ほど接敵した相手ともなると、完全に手の内は読めてくる。

それに、体力もガチンコでやりあった時に比べると格段に落ちている。特に苦戦することもなく悪夢のロクスを撃破し、現世に戻るための光に足を踏み入れる。

悪夢から覚めると、ユウキを取り囲んでいたゲルが弾け、本体のゲルが動きを止める。

突き飛ばされるようにして開放されたユウキは、付近の壁に見覚えのある紋章を見つけた。

そして、直感に従いその紋章を起動させる。

「へえ、よく見たらそこら辺に設置されてんだな。つてことは……」

起動した紋章が大聖堂を照らし、今まで見えなかった位置に同じ紋章があるのが分かる。

それと同時に、ゲル状の物質が硬化し巨大な物体が鎮座する。

「まあ、こうなるだろうな」

本体から切り離された、小さな球体が発する細いビームを打ち消そうと幻影剣を射出するが、いかんせんのが小さい上に、魔力の質が違うように相殺はできなかった。

それ自体は大した威力もないが、動きを止められるのが難点であり、地を這うレーザーやその後に頭部から発射される極太のビームの回避に困難を要した。

(なんだこの……破壊しか頭がないようなバケモノは。そもそも生物かどうかすら怪しいが……)

どう攻めるべきか迷っていると、ナイトメアは再びゲルに戻っている。

慌てて紋章を再起動させるが、その際に飛んできたのは誘導弾であつた。

今度ばかりは当たるだろうとすかさず円陣幻影剣でバリアを貼る。すると幻影剣に弾かれたミサイルはあろうことか発射した本体に激突した。

しかしどこに当たってもいいわけではないらしく、球体のコアのような機関にしかダメージが通らないのを確認したユウキは、一旦ナイトメアをゲルに戻す。

三度紋章を起動させると、今度は側面からヤリ状の突起物を突き出してきた。

初激は回避したが、二回目の射出直前の音に合わせて剣戟を当てると、怯んだのかコアを露出したまま動かなくなる。

「ハ、なるほど。こりゃカモだな」

先程までの鬱憤を晴らすかのようにコアを叩き斬りまくる。ゲルに戻ったら、また紋章を起動してコアを斬る。

コアの出てくる部位が尾部か頭部かで多少の差はあるものの、既に慣れたユウキにはほとんどの攻撃は通用しなくなっていた。

「それにしても硬エな、さすがは軍事兵器つてどこか」

さすがに斬るのも飽きたので格闘に切り替えた直後、耐えかねたのかナイトメアはゲルになったあと溶けるように撤退する。

（嘘でしょ？嘘よね？サーヴァント・ウォルつて陛下の刺客の中で一番守備に特化してるはずでしょ!?なんで撃退できてんの……?）

陰ながら事の顛末を見届けたキヤルは、ユウキの急成長ぶりに着いていけずに慄く。

（仕方ないわね、別世界で^{鎧騎士}ブレドに始末してもらえないわ）

最後の改修を施した刺客に合わせるべく、キヤルは誘導路を作る。まんまと誘導に乗せられたユウキは、途中で朽ちた遺体の所持していた『ヘルメスの杖』を手に進んでいく。

崩れた渡り廊下は、エアハイクとエアトリックで難なく突破し、その先にあったレリーフにヘルメスの杖を掲げると二枚の絵が出現する。

「誘い方が下手だな……迷ったら左の法則だ」

そう呟き、門番室が描かれた絵に飛び込む。

絵画の世界は基本的に鏡写しになっており、道なりに進めば迷うことはない。それに、物理的に通れない場所も多く実質一本道になっていた。

道中の雑魚を蹴散らしつつ進んでいくと、バルコニーのあるギャラリーを発見する。

「お、恐竜の化石か？嫌いじゃないな、そういうの」

間近で観察しようと近づくが、不意に竜が炎の弾を発射してくる。

「なんてもんゲロってやがる。ナイトミュージアムは、勘弁願おうか！」

腹いせとばかりに炎の弾を弾くと、三回ほどで竜は壊れてしまう。

竜を破壊した直後、地鳴りと共に細い通路に鏡が出現する。ご丁寧にハンドルが付近の壁にあるので、要は弄くり回せということだろう。

手がかりも何もないので、一周させようとハンドルを回すと、半周ほどで仕掛けが作動したらしい。

それなら最初から門番でも置いとけと思いつつ、月光が集まった先のアイテムを手にする。近くのプレートには『月光水』と書かれていた。

ギャラリーを後にしたユウキは、まだ行っていない脇道の扉に向かう。扉には『月の光を閉じ込めし珠を見せよ』と記されており、中心部には月光水を嵌め込むであろう穴が空いている。

「この気配……アイツだな」

扉を開け、その姿を見て確信する。

「マジにガッツあるな、気に入ったぜ。掃き溜めには勿体ねえ」

ユウキの声に、鎧騎士が悠然と振り向く。

向き直った騎士は、腰の剣を床に刺し力を溜める。

力の余波はユウキにまで届き、目を開けていられないほどの閃光に思わず顔を覆う。

(命懸けてる、って感じだな。本気で俺を食い止めたいらしい)

閃光が収まったのを確認したユウキは、思わず息を飲む。

兜を脱いだ騎士の素顔は——鏡を前にしたかのような、ユウキに瓜二つの顔。

「……俺の心情世界ってワケじゃねエだろうし、カイザーインサイト覇瞳皇帝の趣味か？」

嘲笑を交えて眩き、背負った剣を抜く。対する騎士の方も、突き刺したままの獲物に手を伸ばす。

(悪いが、俺も負けられないからな。汚ねエなんて言うなよ……!)

ひと呼吸置いて、互いに必殺のステインガーがかち合う。

一つ違ったのは、ユウキの背後に多数の幻影剣が浮かんでいることだった。

だが、それらが騎士に当たることはない。

その姿を炎に変え、瞬時にユウキの後ろに回り込んだ騎士は、そこからボディブローと後ろ回し蹴りのコンビネーションで追い込む。

とつさに防御に回ったユウキだが、完全にタイミングを逸している。

「し、しまっ……!!」

無理な体勢で当たった剣が弾かれ、その衝撃でユウキは己の剣を叩き落されていた。

拾い直す間もなく、ユウキの脇腹を狙って後ろ回し蹴りから蹴りの乱打に繋げる「キック13」がなけなしのガードを貫通して直撃する。

最後の二連蹴り上げで宙に浮かされたユウキを、追撃の兜割りが襲う。

「ぐは……あぐっ」

肩当てを犠牲にすることで裂傷は免れたものの、地に叩きつけられた衝撃であればらが数本折れ、肺に突き刺さる。

激痛と衝撃で思考が一瞬白濁するが、なんとか堪えて頭を動かす。(急激に練度が増してる……どういう事だ? いや、まさかな……)

疑念が鎌首をもたげ、仇敵の面影が脳裏をよぎる。

(改修の度に俺の情報をアップデート、か……なるほどな)

血混じりの唾を吐き捨て、剣を杖に立ち上がる。

顔を上げたユウキが最後に見たのは、見慣れた居合の構えと崩れゆく視界だった。

騎士とユウキの戦いを陰ながら見張っていたキヤルは、騎士の剣がユウキを両断したのを見て思わずガッツポーズを取る。

(アイツの死体を確認したら、思う存分褒めてもらえるわね)

『陛下』に頭を撫でられ、褒美を貰う自分の姿を想像し、僅かながらキヤルは頬を緩めた。

だが、彼女の緩んだ表情は一瞬にして、驚愕のそれに取って代わられていた。

「な……えっ? え……」

ユウキの懐から転がり落ちた、奇妙な表情の浮かぶ黄金色の物体。それが砕けると同時に死んだはずのユウキが立ち上がった。

「アイツの体どうなってんの……?」

「ふう、死ぬかと思ったぜ。これで残機は3つとこだな」

以前時空神像に寄った際、『死の直前に時を戻す秘宝』なるものを数個、頂戴しておいたのだ。

息を吹き返したユウキの前に、騎士が見惚れるような美しい構えで立っている。

両者の位置は、互いにとっての必殺の間合いである。

「……」

「息切れか? その鎧重そうだもんな」

それっきり、ユウキは一言も口を利かず、静かに見つめ合ったままだ。

高まる殺気に呼び寄せられたか、周囲の空気はさらに異界の臭いを

強めている。

長引けば長引くだけ、ユウキが不利なことはあまりにも明白だ。

だが、ユウキは動かない。

同じく、騎士も微動だにしない。

(……)

(行くぜ、猿真似野郎)

互いに何を思うのか、計ったようにきっちり同じタイミングで、両者の剣が大気を割る。

だがユウキの太刀筋は、明らかに先程までとは異なったものだった。

「——!?!」

「真正正銘のとおっておきだ。お前なんぞに見せてやるのはもったいないがな、とくと拝みやがれ!!」

四方八方、全方位から時間差なく降り注ぐ、人間業を超えた剣技。流麗な、まさしく風のように自然で無駄のない、それでいながら果てしなく重たい剣が騎士を襲う。

同時に降り注ぎ、貫き、斬り上げ等々多彩な支援をする幻影剣とのコンビネーションに、さしもの騎士も対処が遅れていた。

「冥土の土産にや最適だけ猿真似野郎。しつかり目に焼き付けて逝っちまえ!」

ユウキの剣は更にスピードを上げ、騎士を容赦なく削っていく。

その間隙を縫って繰り出される騎士の反撃は、虚しく空を斬り裂くばかりである。

渾身の突きがゼロ距離で決まり、騎士は勢いそのままに壁に叩きつけられる

「あ……うあ、あ……」

騎士は何が起こったのか理解できない。

懸命に立ち上がろうとするものの、おびただしい傷が大量の血を吐き出し、もはや手足が自由にならない状態である。

自慢の鎧は粉々に碎かれ、既に残骸と化していた。

「……最後までまともな言語はナシ、か。哀れなもんだな」

眩くユウキの目の前で、騎士の身体は虚空へと消滅していく。後に残されたのはただ、彼の太刀のみ。

使い道はあるんだろうかと手を伸ばすと、役割を終えたかのように崩れ去ってしまう。

だがユウキは、破片の中に煌めく刃を見出していた。

「置土産か？ま、あんなやつにやもつたいねえもんな……」

ユウキが手にしたそれは、まるで幼い頃から慣れ親しんだ物のように馴染んでいた。

鞘から抜け落ちかかっていたそれを収めて歩き出そうとすると、全身にオーラを纏うように吸収されていく。

同時に、その剣の名前が脳内に囁かれる。

「ヤマ、ト……？なんだそれ、聞いたことねえな。閻魔に刀でヤマトねえ……まあ強そうだしいいか」

新たな力を手に、満更でもないといった表情で足元に出現したゲートを潜る。

鏡の世界から戻ったユウキは、最初に飛び込んだ絵の反対側に出現した、水没した地下牢獄の絵に飛び込む。

どういう理屈か、長時間水中にいても全く呼吸に支障はないので、すべての部屋に目を通した。

残るはもう、長大な廊下の先しかない。

廊下を抜けると、狭いが開けた場所に出た。

そこで聞き覚えのある声が反響している。

「（あの面倒くさい霊体どもか。耳に付くから早いところ終わらせたいんだよな）」

地上ならやりようはいくらでもあるのだが、自由の効かない水中なので閻魔刀の能力も全開にし、幻影剣も駆使してガードをこじ開けて仮面を叩き割る。

その際、閻魔刀が（元の斬れ味もあるのだろうか）すんなり仮面やマントを断ち斬るのを見て、ある考えが浮かぶ

——プリンを要求する悪霊の対策に使えないだろうか？

覇瞳皇帝を倒した帰り道に斬っておこうと考えつつ、水牢から脱出

する。

扉を開けた先の階段塔を、闇魔刀の反応が導くまま登り、頂上にあつた「哲学者の卵」という卵状の物体を手に入れる。

それ自身も胎動しているようで、途中で通り過ぎた扉の向こうから感じる波動と共鳴するのを感じ、その先へ行こうとすると頭の中に声が響く。

『真理を求める者よ 卵を投じよ ゆっくりと慎重に 熱したまえ 其は蒼き靈石となり 険しき道への道しるべとなる』

「へえ、こんなことつてあるもんなんだな……」

扉を開け、中庭にあつた炎台に哲学者の卵を入れると、待っていたかのようにグロスライム^{ウオ}が姿を表す。

すかさず付近にあつた紋章を起動させ、ヨロイを纏わせてパターンに持つていく。

「なんだ、ブーメランが増えただけじゃねエか。芸がなさすぎるんじゃないか？それに弾かれる度に行動が止まるんじゃ、カモでしかないんだぜ？」

当然返事はないが、ユウキも退屈をこまかすためのひとり言なので気にも止めない。

ただ、後を付けていたキャルは今にも死にそうなほど青い顔をしていたが。

「(こ、こんなにしてやられるなんて……陛下に知られたらどんな罰を受けるか分かったもんじゃないわ！既に手下がほとんど壊滅してるんだし、最悪隙を見て直接殺るしかないのかなあ……。でも、あんなの見たら返り討ちの恐怖の方が勝るのよねえ……)」

ユウキが難なくウォルを撤退させるのを見届けたキャルは、直感で自分の死を悟った。

どう転んでも助からない、と全身の細胞が語っている。

震える脚を引きずり、最後の手下をけしかけるべくキャルは闇に消えた。

変成が終わった哲学者の卵を引き上げると、「靈石・エリキサ」が脳内に語りかける。

『我は魔の門を開く第一の鍵なり 2つ目の鍵は映し世の世界にある』

「お前らほんと直接脳内に語るの好きだよな……」

呆れつつもエリキサを懐に仕舞い、またも足元に出現したゲートを潜る。

ワープ先は、見覚えのある寝室だった。

初めて鎧騎士と対峙した部屋と似ているが、魔力で空間が歪められており扉という扉が消失している。

代わりに、騎士が出てきた鏡の奥から波動を感じ、それにエリキサも反応を示していた。

「あるもんだな、鏡の世界。みんなにや黙ってた方がいいたろうが……」

鏡を抜け、騎士との初戦の舞台になった広場に降りる。

その中央に見慣れない台があり、そこに置かれた「賢者の石」と刻まれた拳ほどの大きさの石に近づくと、上空に違和感を感じ、横に飛び退く。

予想通り、先程までユウキが立っていた場所に悪魔が降ってくる。

その姿はとても形容し難く、四つん這いで背中から手が生えており、何に使うのか仮面をも所持しているようだった。

さらに、時折身体の一部から目玉を生成しそれを千切って投げたり、背の手に持った状態で振り回していることもある。

「なんだコイツら……まともに相手したくねえ見た目してんな。いやもう目玉とか見せなくていいから」

生理的嫌悪感が頂点に達したユウキは、即座に閻魔刀を取り出し次元を斬り裂く抜刀術と高速で駆けつつ連続で斬り刻む居合術、疾走居合から派生する打ち上げ技に一瞬その場に縫い付ける幻影剣や閻魔刀の他にいつも使っている剣から繰り出される魔力と高速の剣風が絡み合う3連続の衝撃波でなるべく触れないようにしつつ異形の悪魔を討ち取る。

「こんなのが放し飼いなんで、アイツの趣味おかしすぎるだろ。門番にしちや頼りねえし雑魚とは言えねえし……」

辺り一面に毒を撒き散らしながら消滅していく悪魔を尻目に、ユウキは鏡の世界から現世へと戻る。

大聖堂まで戻ってきたユウキは、魔力でできた水たまりにエキリサを投げ入れる。

しばらくすると表面が波打ち、ユウキを飲み込んで魔界へと誘う。内部にはエレベーターがある他、魔界への門が禍々しい口を広げている。

周囲をよく見ると、上下が反転した大聖堂だと気付かされるが、ユウキは折角脱したのにまた鏡の世界かと落胆を隠せない。

魔界への門の一部に窪みがあり、そこに賢者の石を嵌め込むと門が開き、どす黒い魔界の瘴気が直に流れ込んでくる。

「この雰囲気……アイツはもう少し先か。いいぜ、とことん付き合ってやるよ。こんないい男に追っかけられるアイツは果報者だな」

意を決して魔界へと飛び込む。

覇瞳皇帝を倒すことが、今の自分にできる最善の選択だと信じて。

M20～M22直前まで

魔界に降り立ったユウキは、奥から感じる強大な魔の波動に導かれるようにして突き進んで往く。どこからともなく生ぬるい風が吹き、死と退廃の腐臭を運ぶそれや雑多な悪魔を切り伏せるうちに、広いとも狭いともつかぬ空間に出る。

同時に、少し遠くで横たわるキヤルの姿に気付く。

「ユウキ……こよ、助けてー！」

恐らく脚を負傷したのだろう、手を伸ばし助けを乞うている。

「キヤルー！」

駆け寄ろうとした直後、振動と共に周囲に魔力で作られた壁が辺りを覆い、キヤルとユウキを分断してしまう。

振り向けば、散々撃退してきたゲロもといサーヴァント・ウォールグロスライムが殺気を滾らせつつ姿を現す。

「キヤル、離れてろー！」

叫び、紋章を起動させつつゲロに意識を向ける。少なくとも、標的を逸らすことができれば御の字だと思っただためだ。

ゲロ自体に意識はなくとも学習機能はあるようで、これまでの行動を組み合わせコンビネーションとして用いて激しい対抗を見せる。おまけに魔力の壁が行動範囲を狭めるため、以前のように縦横無尽に駆け回って回避や反撃ができるわけではない。

「思ったより面倒だな……こういうのは制作者の意図が現れるというが、まさにその通りだ。まあ、こういう時くらいいいよな」

そう吐き捨て、閻魔刀に意識を集中させる。愛用の剣は「想いを繋ぐ」力がある（破壊力は心許ないが）ので、魔力と意思を持つ閻魔刀と自分とを繋ぐことは魔人への変身を意味する。

全身の細胞一つ一つに、髪の毛の一本一本に魔力を行き渡らせ、身体に流れる血は16ビットを刻み全身を駆け巡る。

着用していたマントは翼状に、それ以外は鱗とも外殻とも取れる見た目に変化していく。

完全に悪魔の姿へと変化したユウキは、閻魔刀を引き付けるように

構えた。

「終わりにしようぜ、クソ野郎！」

その姿に变じぬままでさえ鋭く速い突きは、もはや人間の目には見えぬ速度を与えられていた。

夥しい魔力を帯びた閻魔刀の切っ先が、格納される寸前の尾部コアを捉える。

だが、ユウキは終ぞ気付く事はなかった。

なぜ、キヤルは無防備なままユウキを待っていたのか。

なぜ、魔力の壁が辺りを覆っているのか。

なぜ、ナイトメアはその壁を破壊しないのか。

(予想通り、ウォルはもう役に立たないわね……。でも、アイツを仕留めるのはこのあたしなんだから！)

壁の向こうなぞ知る由もないユウキは、再び紋章を起動させようと疾走居合の構えに移ったばかりであった。

「サンダーボール！」

予想外の事態に、反応が遅れたユウキはまともに電撃を食らってしまふ。

見れば、壁の向こうでキヤルが杖を手に詠唱の構えを取っている。

「みじめな姿ねー！あんな見え見えの罠にかかるなんて！」

「キヤル、まさかお前？」

「甘ちゃんのプリンセスナイトめ、その愚かさを悔いるがいいわ。あんたは陛下の計画にジャマなのよ、死ぬ！」

事情は飲み込めないが、キヤルの魔法をかわす必要もあるという事だけを頭に叩き込み、手早く紋章を起動させる。

幸い、キヤルは詠唱に時間を要するうえに放たれる魔法に追尾性はないので、発動と同時に高くジャンプすることで回避そのものは容易である。

だがそれは、継続的な攻撃ができないということも意味していた。

恐らくあと数回コアを叩けばこのナイトメアは機能を停止するだろう。そう、コアが叩ければ、だが。

(クソっ、コアに近づこうとするのと魔法が飛んできやがる……。だ

がな、魔人を舐めるんじゃないぜ)

頭部コアが露出したのを気に、エアハイクで飛び上がり頭上から体重と剣の重さを乗せた一撃を叩き込む。飛んでくる魔法は、魔人化による堅固な身体で受け止める。

その必殺の一撃に遂に耐えかねたナイトメアが、本体のコアを吐き出す。防衛本能から周囲にレーザーをまき散らすのが、既に飛び退いていたユウキにはかすりもしない。

「行くぞ……ッ！」

一長剣と二刀流を構え、きりもみ回転しつつ突進《ティープステインガー》する。迸る魔力や突進による風圧がレーザー攻撃を無効化しつつ、着実にコアにダメージを蓄積させていく。

突進が終わる頃とほぼ同時にコアは砕け散り、ナイトメアはその形を保てず崩壊していく。

だが、暴走する機械の心臓部を破壊したからとて、すぐに機能停止することはない。

天井にまで書かれた拘束文様が効力を失い、ナイトメアはレーザーを放ちながら消滅していく。

魔力の壁は既に崩壊し、キヤルも辺りを灼き払うように薙ぐレーザーを間一髪で避けるが、脚がもつれ倒れ込んでしまう。

(しまった、た……このままじゃ、あたし……)

崩れ落ちる柱を避けるには体制が悪すぎ、さりとて碎くには時間がなさすぎる。

「きゃああああああつっ!!!」

絶望の叫び。だがその体に傷はない。

間一髪、駆け込んだユウキがキヤルを抱えて跳んだのだ。

キヤルが無事なのを確認したユウキは服の埃を払いながら立ち上がる。

何も言わずに去ろうとする彼に、反射的に声をかける。

「ユウキー……どうしてあたしを助けたの？あたしは、その……」

ユウキは立ち止まって一瞥し、答える。

「美食殿の仲間だからだ。さあ、消えな。次はこうはいかない」

そのまま歩き出すユウキに、尚も追いつがるキヤル。

「ユウキ！」

「寄るな悪魔！その顔を二度と見せるな、魂の灯火が消えた作り物の顔をな！」

いつの間に抜いたのか、闇魔刀を殺気と共に向け声を荒げる。

そこでキヤルはある可能性に気づく。

この男は、貫通式から全て罨であると知ったうえで、ここまで来たのではないか？

ユウキの「甘さ」に打ちのめされているキヤルに、追い討ちの如く声が響く

『失敗したわね、キヤル……。掟は知っているでしょう？』

『陛下』こと千里真那による処刑宣言も相まってキヤルは呆然と立ち尽くすのが精一杯だった。

ナイトメアを退けた部屋を出てすぐに、壁にブチ当たる。どう見ても先へ行けそうな膜は丈夫な骨で守られ、闇魔刀の剣閃にすらビクともしない。

「意地が悪いな……ま、主が主だし仕方ねエな」

そうこうして他のルートを探すうちに、無駄に広い部屋に辿り着く。

眼下には筋のような物体と妙な液体が鎮座しており、身体がその場に降りることを拒否している。

「悪趣味すぎないか？アイツマジでどんなセンスしてんだよ……」

ぼやきつつ、落ちないように注意を払い呪文で覆われた筋の元へ跳ぶ。

剣戟でそれを破壊すると、突然巨大な筋が脈動を始める。どうやらここは洞窟の心臓部らしい。

これ以上は気が触れそうなので、ユウキは一旦外に出ることにした。もう一方の巨大な扉は、まるで何者かを守護するかのような強固な封印で先へ進めなかったのだ。

心臓部の部屋を出ると、先ほど通せんぼをしていた肋骨のような物

が開いていたが、左側の壁から異様な気配を感じて先にそちらの調査に向かう。

強力な魔の波動を放つ壁に振れると、向こう側に吸い寄せられるように落ちていく。

その洞窟は、はたして迷路のように入り組んでおり、且つ四つん這いで背中に手の生えた汚物みたいな悪魔も数匹存在していた。

極力触れたくない相手だったが、幸い1対1なら負ける要素はほとんどないので次元斬で手早く地獄に送り返せばよい。

問題は迷路である。何度も同じ道を歩くうち、苛立ちが頂点に達したユウキは「常に壁に触れ続ける」という古典的な解決策を思いつく。何とか迷路を抜けた先は、縦に長い行き止まりだった。

定期的な骨の龍が炎を吐いてるが、それ以外は見るべく所もないような部屋だ。

「ブツ壊してやってもいいが……上にあるんだよな？それなら」

ニヤリ、と笑みを浮かべ、骨龍の真下まで歩く。そして、その位置からナイトメアにも繰り出した「ディープスティングラー」を発動する。

先ほどとは違い、特に出し切る理由もないので気配の元が近くなったあたりで手近な足場に着地する。

気配の元は、異様な魔力を放つ腕輪であった。手に取ってみると、せわしなく動き回る針を持った時計を骨のようなパーツが抱えた奇天烈なデザインなのが分かる。

(どう使うんだこれ。時計のパーツは……まさかな)

直感に従い、その場で腕輪を起動する。

予想通りに下でただただ炎を吐く機関となっていた骨龍の動きが止まる。

そしてユウキは、これを隠すか破壊するか金持ち相手に法外な値段で売り飛ばすか(某財団に目を付けられたら終わりだが)という事だけを考えていた。

万が一これを持ち帰れば

『なるほど、今後より一層主さまのお世話と管理が捗りますね……♡』
『これを使うと時間が止まっちゃやうんですか!?!ヤバいですね♡早速

使ってみましょう♡』

そうでなくとも、

『私はあなた様が望むならどんなプレイでも……♡』

『弟君がこんな変態趣味に目覚めてたなんて……お姉ちゃんが矯正しなきゃ！（目の光はない）』

『こんなもの使って、レイ様にナニするつもりだったんですか？お仕置きです♡』

『こんな危ないもの、孤児院の子供たちに悪影響でしょ♡私が変な気を起こさないように管理するわ♡』『お嬢様、私も手伝いますよ♡』

等々、それはもう考えたくない事態になるのは目に見えている。

どうにもぞつとしない未来を想像し、頭を振って気持ちを切り替える。

「アイツら俺を見る目が色々混ざってて危ないんだよ……」

既に着ている服も各所がボロボロになっており、見え隠れする肌には傷が無数にある。これを見られた場合、まず熱っぽい視線を浴びた後、急冷された視線と小言のラツシユが小一時間とかそんな次元じゃない程続く。

別に服は誰が繕ってるわけではないし、傷も致命傷を避けたりアイテムで誤魔化したりできるのだが。

以前、美食殿の4人でやたらとデカイ動き回るキノコの討伐に赴いた際に、文字通り「肉を切らせ」て飛び込み、「骨を断つ」戦法を取った所、ペコリーヌとコッコロからしこたま説教をされた事を思い出した。

浴びるのは熱いシャワーに限る、などと考え、来た道を引き返す。丁度反対に位置する膜を切り裂き、奥の洞窟に行く。

先ほどの迷路よりは一本化されており、迷うことはないが代わりとばかりに体力を吸う触手が無数に配置されている。幻影剣で応戦しようにも、ただ引つ込んでいくだけでキリがない。

そしてご丁寧にも汚物が3体徘徊しており、ここはデーパーステインガーで一気に駆け抜けることにした。ユウキは、あまり構いたくない相手に脳のリソースを割いてやるほどできた人ではないのだ。

「うおッ、熱ッ!？」

膜一枚を隔てた先には、溶岩が流れる灼熱の空間だった。

おまけに雷コウモリが2体もいる。うち1体は最初から自分の姿を真似ていて面倒くさいことこの上ない。

足場の悪さも考慮し、エアトリックでコウモリに接近し、その頭を蹴り再度跳躍してエアハイクで手近な足場に飛び移る。

途中で見かけた紋章は、どうやら足場がせり上がってくるもののようにだが、ここまで来れるやつにそんなものが必要かと言われると疑問を感じざるを得ない。飛行能力やジャンプ力に優れていなければ途中で力尽きるのが関の山だ。

灼熱地獄を抜けた先は、先に訪れた洞窟の心臓部の部屋だった。

魔界の空気であるがゆえに冷却された空気が心地いい、なんていうことはなく、ただただ不快感が増していく。

真ん中部分が崩れた足場を一足飛びで飛び越し、対岸の紋章を起動させる。

それに呼応して巨大な扉の封印が解除される音がした。

(案外雑な封印だが……まあこんなところに好き好んで昇ってくるやつもないだろうな)

扉の向こうから放たれる、圧倒的なまでに純粹で、苛烈な、黒い魔力と悪意に怯む様子はない。

ユウキが近づくと、まるでそれを待ち構えていたかのように扉はひとりでに開き、豪華で優美な神殿をその奥に覗かせる。

「もう何度目だろうな。今度はどんなネタで楽しませてくれるんだ?」

薄い笑みと共に洩らされる、皮肉なセリフ。

それに応えるように大気は震え、彼の姿はその奥へと吸い込まれるように消えていった。